



Title	日本で「リメイク」されるアメリカのキルトについての考察：「メイド・イン・ジャパン：アメリカン・キルトが日本に及ぼした影響展」を中心に
Author(s)	片桐, 真佐子
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 58-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75343
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本で「リメイク」されるアメリカのキルトについての考察

—「メイド・イン・ジャパン: アメリカン・キルトが日本に及ぼした影響展」を中心に—

片桐 真佐子 奈良女子大学大学院人間文化研究科

1. はじめに

本発表の目的は、1990 年にアメリカで催された「メイド・イン・ジャパン: アメリカン・キルトが日本に及ぼした影響展」(以下、「メイド・イン・ジャパン展」)の分析を通して、80 年代の日本におけるアメリカのキルトの受容を検証し、世界各地で土着化するキルトの文化的意味を考察することである。

本展“Made in Japan: American Influence on Japanese Quilts”は日本人が制作したキルトを展示するもので、1990 年にニューイングランド・キルト美術館、1991 年にはニューヨークのジャパン・ソサエティーとパリッシュ美術館を巡回した。

アメリカのキルトが日本で注目されるようになったのは 70 年代半ばのことである¹。「メイド・イン・ジャパン展」までの約 15 年間に、アメリカのキルトは日本でどう解釈され、どのように位置づけられていったのであろうか。

2. 「メイド・イン・ジャパン展」に展示されたキルト

「メイド・イン・ジャパン展」で展示されキルトのほとんどがパターンと呼ばれる幾何学的なデザインであった²。中でも「ログキャビン」という西部開拓時代の丸太小屋から生まれたパターンのアレンジが 6 枚あった。また、20 枚が日本の布のみを、16 枚が日本とアメリカの布を併用していた。キュレーター小林恵は、日本におけるアメリカのキルトについての解釈を選考基準としたと述べているが³、それはパターンを日本の布で表現するという視点であったといえる。

3. 考察

1) 日本におけるキルトの受容

1970 年の日本万国博覧会アメリカ館にもキルトが展示されていた。しかし、1975 年と 1976 年に開催された二つのキルト展ほど強いインパクトを、日本の女性たちに与えなかった⁴。この二つのキルト展はアメリカのキルト収集家、ジョナサン・ホルスタインのコレクションで構成されたものであり、日本におけるキルトの受容に多大な影響を与えている。彼は、50 年代後半から 60 年代初期に起こった「クラフト・リバイバル」から、過去の遺物となったキルトを現代アートの一つの形態として注目した一人である。

2) アメリカにおけるキルトの位置づけ

ホルスタインの初めてのコレクション展は「アブストラクト・デザイン・イン・アメリカ」(1971 年、ニューヨーク・ホイットニー美術館)である。カウンターカルチャー運動の影響下、同展はアメリカ女性たちの創造性の表現としてキルトが再認識される契機となり、キルト作りを復活させたとされている⁵。

アメリカに現存するキルトは、装飾的で美しいデザインを持つ 18 世紀以降の上流階級の女性の手によって作られたものである。そのようなキルトは富の象徴であり、鑑賞用(ショー・キルト show quilt)であった⁶。

19 世紀、キルトは「絵文字の書籍」と呼ばれ、文字以外による女性たちの意思表示の手段となる⁷。その流れは 1987 年の「エイズ・メモリアル・キルト」にもつながっている⁸。

このようにキルトは社会に対するアメリカ女性たちの意志表示として、また、アメリカの伝統的文化の一つに数えられていった。

20 世紀、キルトが創造性の表現として再認識されて以来、ショー・キルトはアンティークキルトと呼ばれ、現代キルトとは区別されるようになっていく⁹。

3) 土着化するアメリカのキルト

「メイド・イン・ジャパン展」のキルト制作者たちは1930年代から50年代生まれのごく普通の主婦たちである。戦後の民主主義的な教育を受け、家事や育児に専念することが女性の幸せであるという当時の一般的な規範に直面していた時、アメリカのキルトに出会った。ジェーン・ナイランダーが、アメリカの女性たちはキルト作りの中に、家族のために作るという満足感と自らの創造性の表現を見いだしたと述べているように¹⁰、日本の女性たちもキルト完成時の達成感とともに、同じパターンでも選択する布によってオリジナリティを発揮できることに創造性を刺激されていった。さらに、日本のキルト関連出版物が技術的な専門用語やパターン名に英訳を併記したことで、キルトが新しい手芸としてだけでなく、英語という教養を活かせる手芸としても、日本の女性たちを魅了していったと思われる。

伝統的文化としてのアメリカのキルトは、アメリカ人のアイデンティティーのシンボルでもある。よってキルトにはアメリカのナショナリティが内包されているといえる。

アメリカのキルトを日本人が解釈した「メイド・イン・ジャパン展」以降、語られることになったのはキルトにおけるナショナリティであった。つまり、日本の布というアレンジによって、ナショナリティがアメリカから日本へと移行したことが差異として立ち現れたのである。

このようにアメリカのキルトは、伝播されたところで解釈され、土着化が進んでいく。土着化とは、日本のキルトのように、風土や文化に適合す

るよう「リメイク」されることであり、ナショナリティを移行しつつ、その土地で形成してゆくことである。

日本のキルトはいつしか「和のキルト」と呼ばれるようになった。そして、現在、日本のキルトは、アメリカのアンティークキルトを正統とするキルトと「和のキルト」との間で揺れ動いているのである。

註

- 1 1975 年の「アーリーアメリカンのキルティング展」(3月2日～11日、資生堂ザ・ギンザ)と1976年の「アメリカのキルト展」(7月4日～8月8日、京都国立近代美術館)で、ジョナサン・ホルスタインのコレクションの中のアンティークキルトがまとまった数で展示された。
- 2 36枚の日本のキルトが展示され、そのうち31枚がアメリカ的なキルトであった。
- 3 小林恵『アメリカン・キルト：草の根で社会を動かす針と布』白水社、1999年、p.62
- 4 片桐真佐子「日本におけるキルトの受容－大阪万博アメリカ館のキルトについて－」『家政学研究(奈良)』Vol.65, No.1, 2018年10月, pp.18-23
- 5 ジャクリーヌ・M・アトキンス、成田明美訳『キルティング・トランスフォームド：現代アメリカンキルトの歴史を作った人々』日本ヴォーグ社、2007年、pp.21-22
- 6 ジョナサン・ホルスタイン「マスターピース・キルトとは何か：その歴史的観点」シャーリー・ゼガード、小野ふみえ訳『著名ミュージアム所蔵 アメリカの傑作アンティークキルト』日本ヴォーグ社、1997年、p.12
- 7 パット・フェレロ、エレイン・ヘッジス、ジュリー・シルバー、小林恵・悦子シガペナー共訳『ハーツ アンド ハンズ』日本ヴォーグ社、1990年、p.10
- 8 Cindy Ruskin, *The Quilt Stories From The Names Project*, 1988, pp.9-13
- 9 前掲3, pp.21-22
- 10 Jane Nylander, *American Sampler: Folk Art at the Shelburne Museum*, Washington, DC: National Gallery of Art, 1987, p.42

付記：本発表にご協力いただきました、キルターの舟迫和子さんに心より感謝申し上げます。